平成24年度富山県子育て支援・少子化対策県民会議　議事概要

1　**日時**　平成24年9月3日（月）10:00～11:30
2　**場所**　富山県民会館8階キャッスル
3　**議事**
（1）会長の互選、職務代理者の指名について
（2）「みんなで育てる とやまっ子 みらいプラン」の推進状況について
（3）平成24年度子育て支援・少子化対策について

4　**委員等発言要旨**

石井知事
・少子化が進行すると、社会を担う働き手が減るという経済面だけでなく、安全・安心の面など様々な問題が起きる。また、子ども達同士で切磋琢磨して成長する機会が減るという面もあり大変心配。
・富山県では、保育所待機児童はゼロのほか、私の知事就任後、病児・病後児保育や休日・延長保育の数を増やしたり、学童保育クラブでは、午後6時以降も預かってもらえるところを増やすなど、いろいろ進めてきた。
・平成21年度には子育て支援・少子化対策条例を制定し、それに基づき、51～100人規模の企業の皆さんにも一般事業主行動計画を策定していただいている。国は、昨年からようやく301人以上を101人以上としたところだが、富山県では、51人以上となるよう努力してきた。
・また、富山県では、女性が出産を機に会社を辞めて働く人が減る「M字カーブ」（年齢階級別労働率の折れ線グラフ）のへこみが浅い。その要因に、雇用環境や職場の理解、あるいは男性、女性の働くことに対する意識など、富山県が男女共同参画に理解のある理想的な環境だということがあげられる。
・だが、最近の富山県の合計特殊出生率が1.37となり、今回は全国平均よりも若干低いという私にとってショッキングな結果になった。数字にこだわりすぎてもいけないが、どうしたら若い夫婦が安心して子どもを産み育てられる環境ができるのか。
・富山県は一般的には、住みよく大変いい県だと思っており、子育て・少子化対策について、施策は進んでいるように思うが、なかなか目に見えた成果がもう1つ出ていない。髙木会長さんをはじめ、神川会長代理、各界の委員の皆さまより、忌憚のないご意見、大所高所からのご意見・ご提言等をいただければありがたい。

A委員
・これからの日本の産業で一番の問題は、労働人口をどう確保していくかということ。人口そのものが減る中、働きたいけれども働いてない女性やシニアの活用が一番大事。
・また、個人的にこの10年、妻とともに共働きの娘夫婦を支え、孫育てに取り組んできた。女性が少し時間外労働をしたら保育所の時間に間に合わない等、体制整備がまだ不十分だ。この分野はまだまだ改善していく余地があるし、また、そうしないと国家が中長期的には成り立たない。これは経済界の問題でもあると捉えている。

B委員

・富山県では、M字カーブが浅いということは心強い。ただし、比較するには、東京、大阪というのは特殊で、全く違う性質を持っているため、土地柄も就業関係もとても似ている北陸３県を比較していただけたらと思う。お互い切磋琢磨するためにもよい。
・今、一番問題なのは、未婚率・非婚率と出生率。富山は、少子化がものすごい勢いで進んでいる。
・先日、女性の活躍支援のパネルディスカッションのために、就業後３年以上の一般社員の女性 40 人に意見を書いてもらった。それをまとめたところ、会社に対しては「有給休暇はあるが実際にはなかなかとりにくい。」、「上司の意識啓発やフレックスタイムの導入をしてほしい。」、行政に対しては「学童保育が不十分。自分の校下では入れない。」との意見が出た。制度以上に管理職や上司に問題があるとのこと。
・また、独身の若い女性社員は皆、キャリアも積んで、結婚、出産、育児もしたいと思っているが、育児しながら働いている周りの女性たちを見ると不安で、一歩前へ進むことができないという意見が複数あった。意識調査では、結婚しない理由として「適当な人にめぐりあえない。」と言っているが、本音は違うのではないか。

Ｃ委員

・「みらいプラン」の目標指標の達成度が、順調に推移している項目数の割合が 62%、十分ではないが進捗している項目数も含めた割合が 92%であり、まずまず順調に達成されているのではないかなと思う。
・ただし、仕事と子育ての両立支援の達成度はやや低く、分母が非常に小さいということもあるが、現実問題として職場で両立支援がどこまで納得できているのかなど課題はあるのではないか。経済状況等も関係する指標であるため、トータルの視点で見ていく必要がある。
・施策全体としては非常に多面的、総合的で、至れり尽くせりという感じだ。新規の施策もそれぞれ必要に応じた対策となっている。
・合計特殊出生率は伸び悩んでいるが、出生率は、15 歳～49 歳までの女性の各年齢における出生率の総和で算出している。20 代の半ばから 30 代の初めにかけての層における女性人口の割合がどうなのかということを、北陸 3 県、あるいはよく似たサイズ、状況の県と比較してみる必要があるのではないか。
・富山県は、大学進学率でいうと県外流出率が非常に高い県であるため、20 歳代という働き盛り、結婚適齢期、最初の出産を迎える層が落ち込んでいる可能性がある。その辺のデータ分析等ができれば、もう少し詳しい個別の対策ができるのではない。
・富山県は日本一住みやすく働きやすいと言われている。若い人たちに地域や富山県に対する自信や愛着を持っていただけるような郷土教育、たとえ県外に出たとしても、またＵターンしてきて、富山で働き住もう、富山で結婚・子育てしようという方に、インセンティブを持たせる取り組みも視野に入れてはどうか。

Ｄ委員

・「親学びプログラム」を平成 18 年以降担当しており、「孤独ではない子育て」への支援の体制は少しずつ整ってきているのではないかと思う。困っている身近な人たちへ声をかけたり、手を差し伸べたりとお互いにできるようになってきており、成果はいろいろな所に出てきている。また、富山県の子育て支援がかなり充実してきており、一人一人のご家庭でいえば、子育て環境が非常に良くなってきたのではないか。

・しかし、これから子どもを産み育てていこうという若い世代にその状況が伝わっていないことが、結婚や子育てに今ひとつ踏み出せない原因になっているのではないか。富山は自然環境が大変いいが、全体的に先行きが不安ということがある。自分だけの仕事や生きていくことで精いっぱいで、結婚し子どもをきちんと育てていけるのか。２人、３人、４人と育てていくことに対する不安がある。合計特殊出生率などは、躊躇の証としてなかなか伸び悩んでいるところがあると思う。
・学生に人生設計をさせると、「こんなに将来はお金がいるのだ。」、「富山県だと家を持たなければならないのではないか。」など、周辺を見て感じるプレッシャーが先に立ち、躊躇しているのではないか。
・これから親になる若者に対し支援しなければならない。いざというときには私たち年配者がしっかりと支えていくということだ。
・シニアや女性の力をこれから活用していかなければいけない時代でもあるのだが、もっと若い人たちの仕事を確保できる体制をつくっていく必要がある。
・東京にいる人たちからは「富山は安全だし、環境もいいところだから、ちょっと帰ることを考えてみようかな」という声も聞くが、都会にいるレベルの、今やっている仕事のレベルの雇用や収入が確保できるのかというと、ちょっと不安があるという声を多く聞いている。
・都会と同じになる必要はなく、子どもを増やしていく対策も必要だが、少ないなりにも一人一人の子どもをしっかりと育てていくということも重要。
・社会を賑わせているいじめの問題、自分で自分の命を粗末にするようなことに対する対策もしっかりしていくことによって、一人一人の育ちを支えていくことになる。
・富山は北陸の中の一県だが、比較するだけでなく、もっと視野を広げ、近県との行き来、他県との関わりも考えていった方がいい。近くに石川県もあれば、隣にいろいろな県もあって、さらに行動範囲を広げていくこともできる。いいところが周りにもたくさんあることをお互いの県でＰＲしていくことも必要。仕事の上では、通えるということもあるのではないか。

Ｅ委員

・舟橋村は 15 年間で人口が倍増した。その背景には富山市に近く住環境が非常にいいため、多くの若い人が舟橋村でマイホームを持った。その結果、村民の平均年齢が 38.8 歳と非常に若い。
・彼らは共稼ぎで子育て世代であるため、行政は、子育て支援の面からバックアップしている。
・例えば、朝７時から夜７時までの 12 時間態勢の延長保育を実施している。
・また、保育所で病気を持つ子どもに対する保健指導が必要だと思い、この４月に保健師と看護師の資格を持った職員を採用した。放課後児童についても、保育士あるいは指導者を養成し、対応している。
・企業における取り組みも大切だが、行政側が子育てしやすい体制づくりを進めていくことが、出生率を上げるだろうし、女性の就業もうまくいくのではないか。

Ｆ委員

・一般事業主行動計画策定において、富山県では 51 人以上の企業を条例で義務の対象としていただいている。この届出率が非常に高く、全国でもあまり類を見ない取り組み

となっている。
・しかし、届出をした会社の中で、次世代法に基づく「子育てサポート企業」の認定を受けた会社が今のところ15～16社で、策定届を出したところの１％になっている。この１％が２％にでも３％にでも、少しずつでも上がっていくことが、仕事と家庭の両立支援が会社の中で進んでいっている実績であると思っている。皆さま方からもぜひご協力をいただければと思う。

Ｇ委員

・さまざまな施策が行われており、大変充実していると思っている。
・私のところでアンケートをとったところ、子どもが欲しいと思っている方は結構いる。その中で不妊に悩む方が大変多い。県の不妊治療費助成が２回から３回になっているが、今後もよろしくお願いしたい。
・学童期の夕方６時以降の学童保育が増えているということは、働く人にとって大変ありがたい。しかし、入学前までは待機児童もなく安心だが、学童期に入ってからは、一部預ける場所が不足気味ということを聞いている。
・男女の出会いの場の創出をしていることは、大変素晴らしい。年齢の近い人がこのような場をつくることは若い人たちにとって大変共感でき集まりやすい。若い人たちが企画できるところへの補助金が使われるなど、大変いいのではないか。
・産休や育休明け時における「ならし保育」について、生まれ日によって「ならし保育」が短くてつらかったと言う話を聞いている。その人の実情に合った「ならし保育」が必要ではないか。
・「元気とやま！子育て応援企業」推進事業で、企業トップの方が応援宣言を行い公表したり、入札参加資格の優遇措置を設けたりすることは、大変有効な手段だと思う。
・産休・育休明けに職場に復帰したとき、違う職場に戻らされて、育児と職場の慣れに大変ストレスを感じるという話も聞いている。そういったことなどに対する政策が何かあるといいのではないか。

Ｈ委員

・出生数が減り 8,000 人を切ったことは非常に大変なこと。周産期の施策に関しては中央病院も中心になり、子どもが生まれたときの対策は非常によくしていただいている。
・不妊症に対しても補助を拡充していただいたということは、産婦人科の立場からすれば非常にありがたい。
・産んでいる方は２人、３人と産んでいるが、産んでいない方は全然産まないため、出生数が増えない。
・不妊症で悩んでいる方も年齢が高い方、特に40歳を過ぎた方がそういう助成を受けているが、なかなか妊娠しない。産科的に一番安全に産める年齢帯というのは25～30歳あたりなのだが、その年代で出産する方が実際に少なくなっているのではないか。その年齢帯の人たちに、安心して産んでいただける環境をつくるにはどうすればよいのか。
・若い人が就職できないで非正規の雇用になると、経済的なバックボーンがなく、自分一人だけが生活していくのに精いっぱいで、なかなか結婚して子どもをつくるところまでいかないという人が多くなることが非常に危惧されている。
・いろいろな機会を使い、結婚するように示唆されているが、コミュニケーションスキ

ルというか、一対一で付き合う能力が少し下がってきているのではないかと感じている。産婦人科の医会の中では性教育ということで中学生や高校生に出産の素晴らしさというものも含めて教育している。今の年代はテレビゲームなどが中心になり、一人だけで遊ぶのはいいが、お互いに遊ぶ、一対一で付き合う能力が少なくなってきたということもある。大人になってから婚活の場をつくるのもいいが、もっと若い年代からコミュニケーションができるような能力を身に付けてもらうということも一つ大事かと思う。

・今の施策は非常に充実していて素晴らしいが、産科だけの議論ではなく、経済界の皆さんも含め、全県的に少子化対策を考えていかなければならない。効果が出るには少し時間はかかるが、根気よくやっていくしかない。

Ｉ委員

・富山県立中央病院には、総合周産期母子医療センターが整備され、富山県は北陸で一番お母さんたちが安心して妊娠・出産できる県ではないかと思っている。

・保育サービスはかなり充実してきており大変ありがたい。

・病気になったお子さんがいると、お母さんはどうしても仕事を休めないといった問題によく遭遇する。保育園でも病児保育をしておられるし、開業医の小児科の先生も病児保育をしておられる。開業医の小児科が保育士を雇用したり、病児保育をしようとすると、赤字覚悟。病児保育を努力していただければ、お母さんたちは安心して子育てができるのではないか。

・また、虐待が非常に増えている。シングルマザーであったり、夫の協力や理解が得られない、経済的に不安定である、子どもの育て方が分からない、そうした心の面で不安を抱えているお母さんたちがたくさんおられる。当院では、そうしたお母さんたちに対し、地域の保健師や児童相談所と連携して、保健師にお母さんたちを訪問してもらうなどして、できるだけお母さんたちの心のサポートをしている。このようなネットワークをもう少し市町村や県の単位で広げていっていただければありがたい。

・子育てが分からないなど、いろいろなことに悩んでおられるお母さんたちに対し、集まる場所を提供していただくなど、アドバイスやサポートをしていただければありがたい。

・子どもたちは親を見ているので、私たち親の世代が明るい家庭をつくっていかないと、子どもたちも結婚してくれないと感じている。そうした面で、私たち親自身が努力していかないといけないと思う。

Ｊ委員

・富山市内で、「富山市仲間づくりの赤ちゃん教室」を月１回地区で開いている。３箇月から１歳未満の子どもとその母親を集め、保健推進員と保健師が関わり、６回コースでやっている。近所に自分と同じ環境のお母さんがいるということさえ分からない時代なので、教室に来て、初めて同じ町内であることが分かる。

・そこでお母さんたちの不安など、いろいろな相談を受けている。心理相談員の先生と小児科の先生、栄養の相談の先生等をお招きして、お母さんの不安や、悩みを持っていらっしゃる相談に一回一回お答えしている。

・また、２～２箇月児訪問ということで全戸訪問しているが、中にはうつむいていたりされるお母さんがいらして、心配な場合、すぐ保健師に連絡し、訪問してもらうよう

つなぎの役割もしている。
・富山県の「みらいプラン」を見ていても、不妊治療などは全国でもすごく高く、まだいろいろな面で不十分かもしれないが、そういう面ではすごく先に行っており、一生懸命頑張っていると思う。

K委員

・親子サークルを主宰しているが、当サークルに来ているお母さんたちの意見を聞くと、富山県はやはり父親の育児参加、育児休業の取得があまりないように思える。県庁の方から積極的に父親の育児休業取得の取り組みをしていただければ、母親もとても助かるかなと思う。
・私のサークルの方に来ているお母さん方には県外から来ている方が多く、頼る方が全然おられない。平日は一人で子育てしているというお母さんがほとんど。父親は全然子育てに参加してくれず、土日はいるのが、遊びに連れて行ってくれたり、お風呂に入れてくれるぐらいという方が多いので、是非、父親の育児参加を進めていただきたい。
・子育てに一番必要な30代から40代の男性は、仕事でも働き盛りなので、家に帰ってくるのが遅い。子どもが中学校から高校になると、部活等に行って、土日にお父さんが必要なくなるときに、お父さんたちは、40歳を過ぎたり、50歳近くなって偉くなり、今度はお父さんが土日にいるというスタイルが多く見られる。その辺で、ちょっと偉くなったり、50代になられた方たちが土日は働くから、若いお父さん、お母さんたちは、土日に休めばいいという優しい循環ができる社会ができればよい。
・お母さんたちは平日に一人で子育てして孤立しており、どうしてもイライラしてくる。朝、お父さんが8時に家を出て、夜の10時や11時まで帰ってこない。大人とは誰ともしゃべらない。やっと帰ってきた大人のお父さんに話しかけようと思っても、お父さんは仕事で疲れていて、うっとうしい、うるさいという感じだというお母さんが多くいる。そうするとどうしてもイライラして、虐待につながることもあり得るのかなと思う。お母さんの話をお父さんたちは聞くだけでも随分いいので、お父さんに対し、企業や県からも働きかけていただければと思う。
・富山県は本当に公園が充実しているが、雨の日に遊びに行くところがちょっと少ない。雨が降ると本当に行くところがなく、ショッピングセンターやゲームセンターなどしかない。雨の日に遊びに行ける公園など、通常ある公園に屋根を付けていただけるだけでもいいので、そういう場所があるとよい。
・急に子どもが熱を出したということで会社に電話がかかってくるのは、子育て中にすごく困ること。病児保育というのは、例えば水疱瘡やおたふくということで分かっていて預けることが多いかと思うが、例えばお母さんに電話して「ちょっとお熱があるので、そこの病児保育のところで預かっているね」という感じで、お母さんが会社から急に帰らなくてもいいような病児保育を進めていただければと思う。

L委員

・私自身もほとんど家に帰るのが非常に遅く、子どもとなかなかコミュニケーションがとれていない。
・青年会議所は20歳から40歳までの青年の集まりで、県内に9つある。30代のメンバーで未婚の方が非常に多いと思っている。出生率の低下に歯止めをかけることは、こ

れからの日本の根幹を支える大事なもの。ただ、すぐに結果が出るものでも、答えが出るような問題でもないと思っている。

・青年会議所にも女性の会員がおり、出産でどうしても途中で辞めざるを得ない状況がある。仕事やボランティア活動と育児の両立がなかなかできないということで退会される方も結構いる。近年、女子会ということで、各地域にいる方々や同じ青年会議所のメンバー同士で集まって、いろいろな問題点をお互いに話し合いながら、前向きに社会に活躍の場を求めている女性の方も非常に多い。

・私たち自身もやはり小さいときはゲームなどで育ってきている世代であり、コミュニケーションがなかなかできない世代の一人だと認識している。これがずっと続くと、本当に大変な問題になってくると思うし、出生率低下という部分で非常に大きな問題になる。

・婚活に関してネガティブに考えている方もいるのではないかと感じている。お父さんという、家庭からも慕われる男性像を作っていくことが、これからお互いに子育てをすることにもつながっていくのかなと思う。日本全体あるいは富山県内で、理想とする男性像をプランとして作成してはどうか。

M委員

・私は、家庭教育アドバイザーということで、子育てする親子に対していろいろ支援する活動を行っており、先日も、１泊２日で「親子で自然体験事業」を行った。これは、幼稚園、保育園に通っている年長児の子どもと親子を対象にした事業だが、今回参加された11組の親子のうち８組がお父さんとの参加だった。うち７組はお父さんと子ども二人きりでの参加ということで、お父さんの子育てに対する意識が高くなっていると感じた。

・参加したお父さんもどう関わっていいのか分からないという感じはなく、精いっぱい自分の子どものときの思い出を呼び起こし、子どもたちと体を使って思い切り遊ぶ姿を見て、今はこのような親子関係がきちんと出来上がってきているのだなということをそばで見て感じた。

・一方で、本当に心配しなければいけないのは、このような活動に参加して来られる方以外で、そういう場面に来ようとしない、来られない方たちの支援をどうしていくかということが一番大事なのではないか。

・子育てに関しては、親が子どもに関して誰かに相談できるという環境が大事。子育てに関することでは、とにかく不安や悩みが絶えない。その時、身近な人に相談できる、助け合えるといった環境があることで、「次にもう一人産んでも大丈夫だな」「あと二人いると楽しそうだな」という意識につながり、出生率も上がっていくのではないか。

・自然体験事業では、子育て講座もあり、子育てに対する新しい意識や忘れてはいけない知識などをお父さん、お母さん方に教えることができる。子どもはその間、ボランティアの大学生と一緒に体を使って遊んでいる。夜には、お父さんとお母さんに分かれて、それぞれの不安や不満、どうしたらいいのかなという情報の共有をしている。見落としがちなそういう部分を充実させることでお父さん、お母さん方の意識が上がり、少しずつ環境も良くなっていくのではないかと思う。

・コミュニケーション能力の低さというものは、大人になってから急に上げられるものではない。学校と家庭それぞれで、子どもたちのコミュニケーション能力を上げてい

くことをテーマにして子育てを進めていくことが大事なのではないか。

N委員

・施策的には大変素晴らしいものをたくさん盛り込んでおり、子育て・保育に対し、希望の持てる側面が強くなってきたと思っており、大変感謝している。
・きめ細やかな保育サービス、子育てサービスという点では、まだ不十分。「ならし保育」やお父さんに対する支援など、子育てそのものに対してまだ安心してできる状況になっていないと感じている。
・夏休み中の学童の生活を保障するような場はそれほど多くない。満足できる学童保育になっていると思っている方は本当に少ないと思う。
・保育所も待機児童はゼロだが、自分の生活圏で希望する保育所に入ることはそれほど簡単なことではない。
・マイ保育園制度について、妊婦のときから切れ目のないサービスという点では、まだぎくしゃくとするところがある。
・保育所自身が質を高める努力をより一層していかなければならない。
・賛否いろいろ議論のあるところだが、社会保障と税の一体改革の法案が成立した。私は大変歓迎している。保育所の制度も、幼稚園の制度もすぐに変わるわけではないが、新型の幼保連携型の認定こども園という、今まであった省庁間の縄張りや子育てのやりづらさ、たらい回しといったものをなくす可能性のある施策が誕生した。
・財源的に見ても、消費税から 7,000 億円、その他で 3,000 億円、計 1 兆円ぐらい増える。これまでの国と地方の保育・子育て施策が 2 兆円程度なので、約 1.5 倍になる。財源的にも保証されたものになってきた。
・その中で、学校教育と保育のあり方、子育て支援のあり方、さまざまな子育ての不安やストレスに対応する子育て支援コーディネーターの問題などが出てくる。子育て支援センターは県内に 60 数箇所あり、子育てに対する不安等を解消する役割を果たしている。しかし、まだ下駄履きで行ける範囲にはなく、約 300 の保育園がある中で、68 箇所しかない。もっと地域を網羅した子育て支援施策を実現していく可能性は出てきた。
・今回の社会保障と税の一体改革を受けて、県には、国の施策の充実に合わせ、これまで出たさまざまな子育て支援・少子化対策の課題に取り組んでいただきたい。成果の出る取り組みをするためにも、行政と事業者と県民の皆さんのニーズに基づく活動が一体となって、さらに進むよう、私たち自身も努力してまいりたい。

O委員

・県の施策は十分一生懸命に取り組んできたと思うが、市町村との連携等のしっかりとした少子化政策が市町村に浸透しているのか。
・うちは幼稚園だが、預かり保育等も 6 時ぐらいまでやっている。ただ、放課後の点については、まだ充実していないところもある。地域の子ども、学童保育ということも幼稚園は今後取り組んでいかなければならないのかなと思っている。
・富山県は、お年寄りには住みやすいと思う。うちの父が介護を受けているが、本当にきめ細かくやっていただいている。しかし、子どもに対してはまだまだきめ細やかなところまでいっていない部分も多々あると思う。20 代から 30 代の若い人が定着するまちづくりというか、「富山はお年寄りにとってはいいかもしれないけど、若い人も

すごく住みやすいな」という気持ちを持てるような環境づくり、環境整備も大事かと思う。
・大事な子どもたちが転勤してしまう。県内の大企業を見てもそういうことがある。東京や大阪に出る有能な人材かもしれないが、そこで働くお父さんにも定着してもらえるような、子どもを産む世代の方が富山にしっかりと定着していただけるような施策を考えていただきたい。

P委員

・経営者協会としては、企業のトップの方には「一般事業主行動計画を出しなさい」という形で働きかけてきたが、もう一歩踏み出さなければいけないということで、仕事と家庭の両立という形でアンケートもとりながら、次のステップに行きたいと思っている。
・企業にとっては人の確保が一番重要。家庭と仕事が両立できないと、いい人が定着できず新人も雇用できないということをトップの方にどう意識付けしていくか。実際に家庭と仕事を両立させるための制度や仕掛けを、今後事例を集めながら、トップの方に投げかけていこうと考えている。
・経営者の方は、「当たり前のことが当たり前にできれば」と言われる。当たり前と思っていることを具体的に言葉や文章に書くと若い人は理解する。コミュニケーションの問題は非常に大きな問題と捉えている。企業は組織で動くので、コミュニケーションがとれないと成果が出ないことになる。コミュニケーションをどうとっていくかということは、家庭や学校でも教えなければならないが、企業に入ってからもそういう場面を作っていくよう動いていきたい。

Q委員

・「みんなで育てるとやまっ子みらいプラン」の５箇年計画の半ばになるが、基本的な３つの目標については年々確実に進んでおり嬉しく思う。
・家庭教育の不足というか、質の部分について大きな不安を持っている。親学び普及事業を進めていただいていることは心強く思う。
・少子化の要因ともいわれている未婚化・晩婚化についても、穏やかな明るい家庭づくりを進めていただきたい。子どもたちがその中に暮らせていなかったら、将来自分も家庭を持つ、家庭を作るということに消極的になるのではないか。
・若い保護者の方とお話しする機会があるが、先生方は、学校教育の現場で多くの問題を抱えておられると思うが、家庭教育の中にも入り込んで、家庭教育の大切さについても進めていただきたい。

了